2006年7月13日発行

ニュースレター News Letter

No.14

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

あいさつ

キリスト教と文化研究所
所長
森島 牧人

2001年10月13日に発足しましたこの「キリスト教と文化研究所」も、早いもので五年目を迎えます。これまで当研究所に寄せられました多くの方々からのご支援・ご協力に感謝いたします。

今年度の当研究所研究スタッフの構成は、13名の所員（文学部：富岡幸一郎教授、森島牧人教授、矢嶋道文教授、経済学部：古庄修教授、安田八十五教授、工学部：武田俊哉助教授、松田和憲教授、簑弘幸助教授、法学部：影山礼子教授、村椿真理教授、人間環境学部：モーリス. N. ワード助教授、所澤保孝教授、帆苅猛教授）、学内から5名の研究員、及び学外から25名の客員研究員で、総勢43名です。

本研究所は、創設期より3つの部門（文化研究部門：「キリスト教と日本の精神風土研究グループ」、倫理研究部門：「いのちを考える研究グループ」、実践教育研究部門：「奉仕・ボランティア教育研究グループ」）を設け研究を進めてきましたが、本研究所の前身が「プロテスタント史研究所」であることから、2004年度にはその伝統を受け、以下の二つの研究プロジェクトを含んだ歴史研究部門が立ち上げられました。一つは、「坂田資料研究プロジェクト」（世話人：帆苅猛教授）で、本学の建学の精神「人になれ　奉仕せよ」の制定者である坂田祐（さかた・たすく）の人と思想を、特にその残された日記（坂田日記）の解読を中心に研究していきます。二つめは、「バプテスト研究プロジェクト」（世話人：村椿真理教授）です。本学院教育の基盤であるキリスト教はバプテスト派の伝統をもっていますが、このバプテスト派に関する歴史神学的研究を進めていきます。さらに、2005年度には、グローバル化の進む国際社会において最重要課題である、異なるもの相互の共生の精神の涵養をテーマとした、「国際理解とボランティア研究プロジェクト」が、実践教育研究部門の中に発足しました。これは、本学院のモットーである「人になれ　奉仕せよ」の精神に基づき、異なるもの相互の共生をテーマとした、「サービスラーニングの理論と実践」を研究するものです。また同プロジェクトは、国際理解をテーマに、海外の各大学のもつ知的財産をインターネットを用い共有する、「遠隔講義システム」に関する実験的研究をも行っています。

最後になりましたが、日頃のご理解を感謝すると共に、これからの研究所の活動すべてに、皆様方からのご支援を宜しくお願い申し上げます。

CONTENTS

あいさつ ―― 1
各研究グループ・委員会の2006年度活動計画 ―― 2〜4
公開セミナー『坂田日記を読む』 ―― 4〜5
公開研究会「国際理解とボランティア」
研究プロジェクト ―― 6〜7
所員・研究員の広場
2006年度所員・研究員・客員研究員の紹介 ―― 8

2006年度「バプテスト研究プロジェクト」活動予定

村椿 真理

本プロジェクトは2年中期の期間を設定し、これまで「バプテストの歴史的貢献」をテーマに研究プロジェクトメンバーによる執筆論文の中間発表を中心に活動してきた。05年度までに延べ8回の定例会を行い、8名の研究発表が行われた。しかし諸事情によりそれぞれの論文執筆完成が遅れ、出版準備に取り組むことが予定通りできなかった。そこで前年度の終わりに研究プロジェクトの研究期間一年延長を協議し、2006年秋頃までに各自の論文をとりまとめ出版することを決め、今年度の活動を継続することとなった。今年度は第1回定例会を5月25日に既に行い、次回は7月27日に影山礼子所員による研究中間発表が予定されている。研究論文は9月を最終原稿締め切り期限とし、年度の後半は論文集の発行準備にいよいよ取り組みたい。また2007年度からの次期バプテスト研究プロジェクトの共同研究テーマについて協議し、年度後半はその計画案作成にもあたりたい。バプテスト研究の意義を改めて覚え、一層充実した共同研究の場を構築していきたいと願っている。

（文責：村椿 真理）

「坂田研究プロジェクト」2006年度研究計画

帆苅 猛

今年度はまず、例年のとおり坂田創氏、および、佐々木晃氏にそれぞれ日本語と英語の坂田日記を解読していただき、それをデジタルの資料として保存することに努めたい。とくに、坂田創氏が精力的に日記を解読してくださっているので、それをできるだけ迅速にデジタル資料にしていきたい。併せて、日記を通して時代の動きや関東学院の歴史についても学んでいきたい。

このほか、さまざまなところに保管されている学院史資料、坂田関係資料等について、学院史資料室とも連携しながら調査し、何がどこにあるかを確定していきたいと考えている。

さらに、外部講師を招いて、「白雨会を通じての坂田祐と内村鑑三の関係」をテーマとするような公開研究会が開けないかどうか、検討している。

これまで、日記を通して、また公開研究会を通して坂田祐を中心に研究を進め、坂田関係の資料をデジタル化して保存してきた。これらの成果を、次年度を目標にして、何らかの形で出版したいと考えている。今年度はそのための準備を重ねていきたいと思っている。

（文責：帆苅 猛）

「国際理解とボランティア研究プロジェクト」活動予定

古圧 修

私たちの研究プロジェクトの今年度計画の大きな特徴は「タイ北部岳少数民族の自発的経済発展に寄与する農業経済的支援モデルの考察 ―アカ族ホイコム村の事例を中心に ―」というテーマで山岳少数民族の村を研究対象としたプロジェクトが始まったことです。今年は実際にタイ北部チェンライ県郊外のホイコム村に研究員が赴き、研究計画書に基づいた取材調査活動を行います。タイ国内へ隣国ミャンマー（ビルマ）から移住した少数民族は10数種類を数えますが、その中で今回はアカ族という移動型農耕を主体とした生活を営む種族を対象としました。現在、彼らはタイ政府による強制移住やそれに伴う定住化のため現金収入を得ないと生活できない状況にあり、日雇いなどの過酷な労働条件の中で生活しています。彼らが自発的に行う労働により継続的な収入が得られるようなモデルを農業経済を主軸とした取り組みの中で彼ら自身が作ることが可能であるかを模索します。また今年度より客員となられた東京農業大学菊池昌弥農学博士が今回、プロジェクトリーダーとして参加されることはメンバーにとっても心強いことです。今年度の調査活動で得られたデータをもとに来年度は実際のモデル構築を現地で試み、再来年度はその結果を論文にまとめることを予定しています。今年度も年数回の研究会を開催し、その研究成果を発表いたします。（文責：勘田 義治）

「キリスト教と日本の精神風土研究グループ」

富岡　幸一郎

研究テーマとしては、日本におけるキリスト教の受容を中心に研究を進める。具体的には、①明治以降のプロテスタント、カトリック等の受容。②比較宗教（仏教などとキリスト教との比較研究）。③靖国問題について。の3つの研究課題を予定している。

第1回の定例会は6月17日（土）に富岡所員の「北村透谷とキリスト教」の発表を行い、本年度の各テーマの研究予定について話し合いを持つ。定例研究会は①～③のテーマの中で少なくとも各1回は行い、秋以降はそれに基づいて課題をまとめていきたい。また外部の講師も招いて公開研究会、シンポジュウムなどを開催したいと考えている。

戦後61年の現在、日本におけるキリスト教会、キリスト者の発言と活動は様々な意味できわめて重要となっている。現在社会の混迷の中で、日本の精神風土にキリスト教がいかに関わるかはアクチュアルな問題であると思われる。

（文責：富岡 幸一郎）

「奉仕・ボランティア教育研究グループ」

影山　礼子

これまで私たちは、奉仕・ボランティア教育に関して私立中・高の先生方にアンケート調査を行い、また教科書記述の分析なども行ってきました。今年度は若干名の私立中・高の先生方から実践報告をいただいた上で、中・高校生にアンケート調査を行い彼らの奉仕・ボランティア観と実態を明らかにし、その課題を探って見たいと考えています。

第1回・第2回定例研究会（4月27日、5月25日）は今年度の活動方針、その他について話し合いました。第3回・第4回は公開研究会です。秋以降は研究発表やアンケート調査を実施し、課題をまとめる予定です。

第3回公開研究会は、6月3日（土）に「奉仕・ボランティア教育についての実践報告 ― 聖学院の事例から」のテーマで戸辺治朗講師に報告いただきました。第4回は平和学園から実践報告をいただく予定です。

（文責：影山 礼子）

「いのちを考える研究グループ」

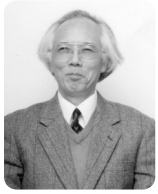
松田　和憲

2006年度も、昨年引き続き、人間環境学部、大豆生田先生の授業において、各客員研究員が「いのち」というテーマで、授業を行い、学生との対話の中で、その問題を深めていきたい。

またそれらに基づいて、この問題をさらに、「いのち」にかかわる諸問題との関連において体系的、倫理的にまとめ、それを何らかの形で、所報「キリスト教と文化」において発表したいと願っている。（文責：松田 和憲）

2006年度 資料委員会 活動計画

矢嶋　道文



2006年度における資料委員会の活動は、過去4年間の活動を引き継ぐ形で行う。

資料委員会では、(1)旧「関東学院大学　日本プロテスタント史研究所」（1957年～1973年）所蔵文献の再調査およびその整理、(2)日本バプテスト史関連資料の発掘・収集、(3)関東学院史関連資料の発掘・収集、を主目的に2002年度以来活動している。このうち、(1)については、旧研究所発行「日本プロテスタント史関係資料目録(その1)」の内、およそ半数が整理・確認（記録）されているが、現在休止中である。ついで、(2)については、R．モリソン、N．ブラウンなどの貴重資料を揃えており、本年度も継続的にコレクションの充実化を進める。また(3)については、昨年度「アメリカンバプテスト宣教師」による日本伝道関係の資料を複写入手したことから、今後の活用次第では学院史の一端として活用することが可能であろう。

本年度の新しい試みとして、これまでに収集してきた資料をもとに、N．ブラウンの研究者である川島第二郎研究員からお話を伺う公開研究会（6月、7月、9月の3回）を予定している。この研究会については、昨年度新たに発足した「バプテスト研究会」との連携を密にしたいと考えている。なお、図書館本館の協力・支援の下、関連資料の一元的な整理・保管のあり方を模索・検討する課題については今後も粘り強く進めて行きたい。　（文責：矢嶋 道文）

広報委員会　活動計画

簑　弘幸

広報委員会の活動は、ニュースレター等の刊行物を編集、出版すること、及び2002年の開設から4年を経過したホームページのコンテンツを一層充実させることである。特に、近年のインターネット環境の飛躍的な発展に鑑みて、ホームページを媒体として研究活動に関する情報を速やかにアップデートし、世の中に発信していくことは、広報委員会の重要な責務である。本年度は、コンテンツの充実とともに、円滑な情報更新作業の手順確立を目指して活動する。次に具体的な活動予定を2点示す。

(1)研究会開催のお知らせなどの新着情報を、できるだけ速やかに掲載するための手続きを確立させたい。このような更新作業は、事務局担当者とコンピュータスキルを持ったホームページ管理者とが密接に連携することが大切である。本年度より、大学院生を管理者として登用しており、よりタイムリーなアップデートが期待される。

(2)昨年度より研究会での講演をビデオに録画し、DVDを媒体として保存しており、希望者にはDVDの貸し出しを行っている。また、ホームページのコンテンツを充実させる活動のひとつとして、講演会の一部を抜粋して映像ファイルを編集し、それをインターネットで閲覧する環境も提供している。本年度もこれらの活動を継続する。

（文責：簑 弘幸）

公開セミナー　「坂田祐研究」プロジェクト
「キリスト教と日本精神風土」研究グループ共催

『坂田日記を読む――関東学院の歴史と当時の世相』についての報告

キリスト教と文化研究所「坂田祐研究」プロジェクト　世話役　**帆苅　猛**

去る2月17日（金）午後17時20分より、関東学院大学関内メディアセンターを会場にキリスト教と文化研究所の「坂田祐研究」グループと「キリスト教と日本の精神風土」グループの共催で公開セミナーが開催された。内容は、「坂田祐研究」グループでこれまで精力的に研究を進めてきた『坂田日記』の紹介を中心とするものであった。

『坂田日記』は、現在判明しているところでは、坂田祐が20歳の1898年（明治31年）から最晩年の1969年に至るまで66冊の日記帳から成っている。多くは日本語で書かれているが、一部に英文で書かれたものもある。間に欠けている期間があるが、几帳面な坂田のことであるから、その期間日記を書いていないということは考えにくい。われわれが調査したところでは、その部分は大半、小型の手帳サイズの日記帳の形で三春台の坂田記念館に保存されている。ただ、これがいわゆる『坂田日記』の一部なのか、もしくは、備忘録程度のものなのかは現在のところははっきりしない。

いずれにせよ、現在ある日記だけでも膨大な量であり、そのうえ英文も日本文も坂田独特のくせのあるつづけ字で書かれているので解読するのが非常に困難である。そこで日本語の日記はご子息（養子）の坂田創氏に解読していただいている。この日本語の日記は、現在、1944年から1946年までの部分の解読がほぼ終了し、順次、パソコンに打ち込んでデジタル資料として保存する作業を進めている。

英文日記については佐々木晃氏（坂田創氏の実弟）にご協力いただき、解読および翻訳作業を進めている。英文日記のほうは、中学関東学院が設立された1919年の分はほぼ解読・翻訳が完了している。今回のセミナーでは、これまで読み進めてきた日記の中から、当時の学院の歴史や時代の世相を探ろうとするものであった。

経済学部安田八十五教授の司会により、最初に工学部の楠木紀男教授（「キリスト教と日本の精神風土」グループ代表）の挨拶で始まった。

引き続いて、帆苅が『坂田日記』や「坂田祐研究」グループのこれまでの研究経過および今回の公開セミナーの趣旨についての話を行った。

セミナーでは、はじめに坂田創氏が1944年から1945年にかけての日記を紹介された。この時期は戦局が厳しくなり、そして、敗戦を迎えるときである。それが日記の中にも反映されている。

まず、1944年の分では、「1、時局の推移」、「2、防空態勢」、「3、学校行事」、「4、高等商業部」、「5、航空工業専門学校」、「6、三崎宿舎」、「7、その他」の順で坂田日記の内容が紹介された。

「1」および「2」において、日本軍が徐々に劣勢に立たされ、それに応じて、防空壕などの防空態勢が学内にも整えられていく様子が示される。まず、マーシャル群島の日本軍が玉砕し(2月26日)、それがサイパン(7月19日)、テニヤン(10月11日)に及ぶ。このように戦局が険しくなっていく中で、関東学院の敷地の中に防空壕が掘られ(5月8日)、防火用のプールが造られる(12月8日)。そして、徐々に空襲警報が鳴り響くようになる。

「3」では、戦時下の学校行事が描かれる。当時、国家によって強制されていた「国民儀礼」(宮城遙拝)、「教育勅語奉読」がしばしば学校行事として行われている。また、配属将校による「軍事教練」がなされ、その「査閲」も行われる。坂田祐の『恩寵の生涯』によると、配属将校はしばしば、礼拝の賛美歌で平和に関するものは反戦思想であり、天の父なる神を賛美する歌は日本の国体に反するものであるとして、聖書の授業および礼拝を止めるようにとの干渉があったとのことである(288頁)。しかし坂田は、学校教育は文部省の管轄であり、教練のみが軍部の管轄であるから、学校の宗教に関係したことには干渉されないようにと断り、礼拝は一度も止めることなく続けたとのことであった。

続いて、「4」および「5」では、文部省の指導によって関東学院高等商業部が明治学院に統合され、その代わりに航空専門学校が設立された経過が紹介される。坂田は最終的には9月に統合するように提案するが容れられず、やむを得ず第一学年は4月から明治学院に送る苦汁の決断を

する様子がうかがえる。関東学院はその代わりに航空専門学校を開設することになる。大急ぎで準備がなされ、3月末に入学試験をし、4月8日に130余名の新入生を迎えて入学式を挙行する。

さらに、「6」では三崎にあった関東学院の寮について触れられる。この寮は海軍の強い要望によりやむを得ず潜水技術養成所の施設として譲渡することになる。

1945年の日記については、「1、時局の推移」、「2、空襲・防空態勢」、「3、学校行事」、「4、戦後学院の変化」、「5、六浦校地・校舎」、「6、その他」の順で資料が用意されたが、時間の都合上、「1」、「2」の部分だけ紹介された。その中でもとくに、5月29日の横浜大空襲で関東学院も被災した様子が詳しく紹介された。

このあと、佐々木晃氏による英文日記の紹介がなされた。佐々木氏は坂田の英語とのふれあいから始まり、坂田の英文日記の特徴、坂田の英語での演説などを紹介してくださった。このほか、関東学院の英語教育、関東学院で発行された英字新聞についても話してくださった。そして最後に、1919年の英文日記より、内村鑑三の弟子グループ「白雨会」(代表が坂田)の教友小出義彦が危篤状態に陥り、亡くなる中で、坂田の小出およびその家族に対する配慮を詳しく紹介し、それを通して、坂田の人となりを示された。

最後に森島牧人所長の挨拶で閉会し、そのあとはラウンジでの茶話会に移った。閉会の時間は予定より一時間ほど遅れたが、茶話会にも多数の方が残り懇談の輪に加わってくださった。セミナーの参加者は50余名であり、この種の会合にしては思ったよりたくさんの方が参加してくださった。

キリスト教と文化研究所主催

「六浦・チェンマイ同時中継 子ども交流会」

客員研究員：勘田　義治

チェンマイでも六浦小学校でも子ども達がスクリーンを喰い入るように見つめ、時には驚きの声を、時には喜びの歓声をあげている光景を私たちは当日、それぞれの会場で見ることが出来ました。この日を迎えるために子ども達はお互いに相手の国の言葉を習い、讃美歌を相手の国の言葉で歌えるように練習してきました。六浦小学校の子ども達にとっても、タイの子ども達にとっても今まで手紙やビデオで交流してきた友達とスクリーンを通じて直接交流が出来たのは何と嬉しいことだったでしょう。お互いの声や表情、肌の色や着ている衣装をはっきりと見ることが出来ただけではなく、生の声をそれもリアルタイムで、聴くことが、そして話すことが出来ました。本年度より当研究所では研究プロジェクト「国際理解とボランティア」を始めました。それは奉仕の精神に溢れた学生を育てるために学院内でこれまで行われてきた、そして今行われている奉仕教育を振り返り、建学の精神に照らし合わせた奉仕教育「サービスラーニング」の研究を目的としています。今回はその中での試みの一つとして私たちはこのプログラムを企画し実行しました。このプログラムが六浦小の子ども達の心の成長に役立ったり大学での研究開発や授業の幅が広がるだけではなく、生徒達が立場や境遇の違いを理解し共に助け合う「建学の精神：人になれ　奉仕せよ」の内実化・活性化を目指す教育プロジェクトの一つとして皆様にご理解頂ければと思います。

2005年12月22日午前11時（現地時間9時）、関東学院六浦小学校チャペルとタイ国チェンマイ市内バプテストコンベンションオフィスの会議場とが6本のISDN回線によって結ばれ同時双方向中継交流会が始まりました。それはスクリーンとプロジェクターを使った大型テレビ電話の様なもので、それぞれの会場が実は6000キロも離れているとは全く感じない、まさにバーチャルな空間の出現です。六浦小学校のチャペルには児童500名、チェンマイの会場にはエイズ被害者孤児院「愛の家」の孤児達（チェンマイ市内）25名、山岳少数民族カレン族ティワタ村ハイナムカオ教会子供寮の子供達代表25名（チェンマイ市郊外）が詰めかけ、固唾を呑んでスクリーンを見つめていました。六浦小の内田教頭の司会によって始まったこの交流会はクリスマスの祝会であり、祈り合い、賛美し合う礼拝でもありました。タイ側からは施設の代表者や教会牧師がメッセージを伝え、日本側からは松本学院長がメッセージを、森島所長が祝祷を捧げました。お互いに「聖この夜」を歌い、質問に答えたりした後、映像が消えるまで子ども達は手を降り続けていました。約15分の中継とはいえ、会場は大きな恵に包まれました。この映像は学院、六浦小、当研究所のホームページにてご覧頂けます。

さて文学部森島研究室ではヴァーチャル大学と称して海外の提携校と同時双方向通信による授業の研究・開発を2003年より進めてきました。昨春いよいよその実験が終わり海外の提携校と教室を回線で結ぶ段階までこぎ着けまた。私達はこのシステムを広く学内の方々に知って頂くためにはそれにふさわしい企画が必要と考えました。六浦小では過去12年にわたりタイ国の少数山岳民族の子ども達やエイズ被害者の孤児達を教育や生活面において支援しています。支援金の募金活動やクリスマスカードの交換、夏休みを利用した子ども訪問団の派遣です。さらに2004年より文学部、工学部、経済学部の学生がボランティアグループを作りサポートチームとしてタイ訪問団に参加するようになりました。大学生と小学生が手を繋ぎタイの山の村に赴くこの支援活動は前述の「サービスラーニング」を一貫教育の場で具体化したものといえます。今回六浦小学校の全面的なご協力を頂きこの様な中継が実現し、六小の子ども達とタイの子ども達が一緒にクリスマスを祝い、共に賛美する時間を持つことによって子ども達のみならず

私たちもお互いの国や文化、そして生活環境や境遇などを学び合うことが出来ました。今後、多くの方にこの映像を見て頂く事により六浦小学校の生徒による心温まる奉仕活動の様子と大学の将来を考えたヴァーチャルシステムの有用性を皆様にお知らせし、世界的に深刻な問題であるエイズ被害者の救済や減少につながることになればと祈っています。

尚このプログラム開催にあたりＮＴＴ東日本、㈱電子システムの方々が会社を挙げてご協力、ご支援をして下さいました。また六浦小の先生方や学内多くの方がご協力、ご助言して下さいました。皆様へ心より感謝致します。

（文責：勘田 義治）

ルワンダから「国際理解とボランティア」を考える

ルワンダ・リーチNGO現地職員：佐々木　和之

このたび、「国際理解とボランティア」研究グループの客員研究員となりました佐々木和之と申します。私は昨年の10月から、ルワンダの現地NGO「REACH」（Reconciliation Evangelism And Christian Healing）の職員として、長年の紛争によって深い傷を負ってしまった人々の癒しと和解を目的とする支援活動に参加しています。関東学院のみなさまには、以前エチオピアで約8年間農村自立支援活動をしていた時にご支援をいただくなど、これまで大変お世話になって参りました。昨年、ルワンダでの「平和と和解のプロジェクト」を開始するにあたり、松本昌子学院長に支援の要請をさせていただいたところ、学院をあげてご支援下さるとのご快諾をいただきました。それ以来、特にルワンダ支援の拠点になって下さった関東学院三春台小学校のみなさんと交流を持たせていただいております。

アフリカの小さな内陸国ルワンダは、まだ私たち日本で生まれ育った者にとって馴染みの薄い国です。私は今から約6年前に初めてルワンダを訪ね、未曾有の大虐殺と内戦の後を生きる人々と出会いました。その後、ブラッドフォード大学平和学部博士課程に在籍する研究者という立場でルワンダを度々訪れ、現地の人々との関係を深めていく中で、彼ら・彼女らの「憎悪を乗り越え、再び共に生きていく」というとてつもなく大きな課題が、私自身の人生にとっても重要な課題になったのでした。

80万人以上が犠牲になったジェノサイド（集団殺戮）から12年が経過し、ルワンダ国内は、「戦争が無い」という意味においては平和になりました。内戦で破壊された首都キガリは、見違えるほどに復興しています。しかし、現地の人々が負っている傷はあまりに深く、未だに彼ら・彼女らの心と身体に刻まれています。特に、フツ系住民とツチ系住民の間では、今も憎悪や相互不信が渦巻いています。しかし、私が一緒に働いているREACHのメンバーをはじめ、困難を極める状況の中でも、憎しみを乗り越え、平和な未来を築いていこうと働いているルワンダの人々がいることも事実です。私は、彼らの働きが実を結ぶように、現地にじっくり腰を据えて支援活動を進めていきたいと思っています。

ルワンダ在住のため、日本での研究グループの活動に思うように参加することはできませんが、今回「国際理解とボランティア」研究グループに加えていただいたことを、大変貴重な機会として感謝しております。遠いアフリカの平和構築に取り組むNGOと日本の学校現場が、具体的にどのような形で協力していくことができるのか？日本の児童・生徒・学生に、どのような方法で世界の紛争と平和の問題について伝え、理解を深めてもらうことができるのか？また、現地に関する学び（国際理解）をどうのようにして具体的な活動・支援・奉仕に結び付けていってもらうことできるのか？これらは、紛争後のルワンダという現場で働く私にとって大変重要な問題です。三春台小学校をはじめ、関東学院のみなさまとの交流を通してこれらの問題を考察し、将来「国際理解とボランティア」教育の一事例として報告させていただければと思っております。

「国際理解とボランティア」研究グループのメンバーのみなさまをはじめ、キリスト教と文化研究所のみなさまには、今後いろいろとご指導いただくことになるかと存じますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

所員・研究員の広場

着任にあたって

工学部　物質生命科学科
武田　俊哉

昨年度に本学に赴任したばかりですが、この度縁あって本研究所員に加えて頂きました。

現在は生物化学工学を専門として研究・教育を行っていますが、高校2年までは社会科（日本史）教師になることを思っていました。技術者を志望して理系に進みまして以来、歴史や宗教については趣味の範囲で接してきました。本学へ着任し、本研究所の所員となりましたことは、何かの導きのようにすら思えます。

若輩ではありますが、曖昧ながらも日本の中に息づいていた「神様」の想念が薄れてきていることを感じています。日本における宗教を巡る問題は、その点からあるいはその反動として生じているように思われます。科学の発展に相俟って歴史的宗教観からの乖離が生じることは仕方のないことと思いますが、それが宗教全般からの乖離に繋がることは望ましいのか。職場や家庭で教育に携わっていく中で考えてしまいます。科学が複雑系など総体的な現象をも対象としている現在、科学観からも宗教や神について再検討することができるのではないかと感じています。

不勉強なところは多々あるかと存じますが、宜しくお願い申し上げます。

新入生として

人間環境学部　現代コミュニケーション学科
牧野　宏子

1989（平成元）年は、芭蕉が「奥の細道」の旅に出た元禄2（1689）年から、数えて300年目にあたり、東北を中心に各地で色々な催しが企画されていた。その春、私は、関東学院女子短期大学国文科に、専任講師として勤めることとなった。多くの学生と同じく、キリスト教との関わりは幼稚園以来。学校の様々な宗教行事は、どれも新鮮に眼に映り、1年目のクリスマスなどは、学内の飾りつけの美しさとともに、忘れられない思い出である。

この数年、「尼門跡」、または「比丘尼御所」と呼ばれる、京都や奈良の尼寺の調査に参加している。古文書類には、尼僧たちの書き残した和歌、手紙、経典等も多く、（信仰）というものを改めて考えることが、私の課題となってきた。また、アジアの他の国と、日本のキリスト教行事観との違いも、以前から関心を持っている。

今回、この研究所のグループに加えていただき、先生方にいろいろ教わりながら、新しいことを学ぶのを楽しみにしている。

2006年度 所員・研究員・客員研究員の紹介

所　員

所長　森島　牧人　（文学部教授）

「バプテスト」研究プロジェクト
村椿　真理　（法学部教授）

「坂田祐」研究プロジェクト
帆苅　猛　（人間環境学部教授）

「国際理解とボランティア」研究プロジェクト
古庄　修　（経済学部教授）

「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ
富岡幸一郎　（文学部教授）
武田　俊哉　（工学部助教授）

「いのちを考える」研究グループ
松田　和憲　（工学部教授）

「奉仕・ボランティア教育」研究グループ
影山　礼子　（法学部教授）
所澤　保孝　（人間環境学部教授）

資料委員会　矢嶋　道文　（文学部教授）
所報委員会　安田八十五　（経済学部教授）
広報委員会　簑　弘幸　（工学部助教授）

研　究　員

「国際理解とボランティア」研究プロジェクト
小林　照夫　（文学部特約教授）

「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ
牧野ひろ子　（人間環境学部助教授）
楠木　紀男　（工学部特約教授）

「いのちを考える」研究グループ
大豆生田啓友　（人間環境学部助教授）

「奉仕・ボランティア教育」研究グループ
高野　進　（経済学部特約教授）

客　員　研　究　員

長井　英子（本学非常勤講師）い　松岡　正樹（日本バプテスト新学校教務主任）資 バ　花島　光男（キリスト教学校同盟勤務）坂 キ
佐々木 敏郎（彰栄保育福祉専門学校学園長）資 バ 坂　小川 圭治（元学院長）坂 キ　大島 良雄（元文学部教授）バ キ
石谷 美智子（本学非常勤講師）い　吹抜　悠子（キリスト教メンタル・ケアーセンター理事、相談役）い　三浦　一郎（本学非常勤講師）い
中島　昭子（捜真女学院中学校教頭）キ 資　安達　昇（横浜市立青葉台小学校教諭）い　川島　第二郎（日本バプテスト横浜教会員）資 バ
坂田　創（元関東学院中・高等学校教諭）坂　佐々木　晃（元関東学院中・高等学校教諭）坂　藤原　久仁子（山梨学院大学非常勤講師）キ
田中 喜芳（本学非常勤講師）キ　田代 泰成（横浜女学院中・高等学校教諭）キ　三井 純人（カウンセラー）キ　佐々木 和之（ルワンダ・リーチNGO現地職員）国
山本　直美（本学非常勤講師）キ 国　勘田　義治（本学非常勤講師）国　島田　正敏（関東学院六浦小学校長）国
加藤　壽宏（中央学院大学非常勤講師）国 キ　菊池　昌弥（東京農業大学国際食料情報学部副手）国　村上　顕（元本学教授）奉

参加研究グループ
バ「バプテスト」　坂「坂田祐」　国「国際理解とボランティア」　キ「キリスト教と日本の精神風土」
い「いのちを考える」　資「資料委員会」　奉「奉仕・ボランティア教育」

関東学院大学　キリスト教と文化研究所
〒236-8501
神奈川県横浜市金沢区六浦東一丁目50番1号
TEL：045-786-7873（研究所直通）
発行者：森島　牧人
Director：Makito Morishima